

茅風



— Breeze from the field of thatch-grass —

2003年11月3日

(森林文化の日)です!

森林整青水

事務局便り

茅風通信7号

かや原の
山粧うて
みな優し

良子



10月18～19日、第4回フィールドスタディ開催。原剛さん他4人の初参加者を含め26人が、一生に二度とないほど心地よい天候と地元古老お二人の指導のもと、茅刈りマスターの上、茅の輪と番小屋を完成!!

カヤ原の植生調査も初めて実施。36種類にもおよぶ植物が確認されるなど、興味深い結果が出ました。

— 今号の目次 —

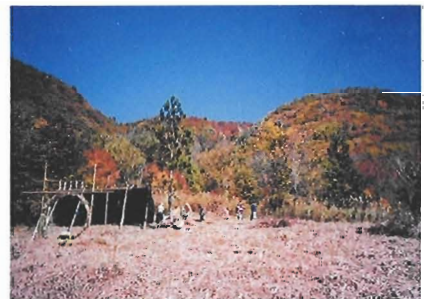
1. カヤ原の植生調査結果について・・・2
2. 古老ヒアリングの結果について・・・5
3. 茅刈りと茅の輪、番小屋づくり・・・5
4. 朝の散策—美しき音との出会い—・・・8
5. 原剛さんからのメッセージ・・・9
6. 事務局からの報告とお願い・・・10
7. 編集後記—フィールドスタディの反省—・・・12



秋のススキ草原



茅刈り



番小屋と茅の輪



谷川岳を望む



完成した番小屋と茅の輪の前で



霧ヶ峰高原

1. カヤ原の植生調査結果について

■茅場（ススキ草原）の植生調査の結果（海老沢秀夫）

カヤ原（ススキ草原）で10月18日（土）と19日（日）、植生調査を行いました。18日に調査区を設定し、19日に中島武さんと斉藤さんの参加を得て本番調査をしました。特に武さんには植物の同定でお世話になりました。また役場の木村さんには、刈り取った植物を送ってもらうなど、お手間をとらせました。ありがとうございました。

●調査区について

- ・テントのところから仮小屋のところまでの間の、ススキが比較的密生している地区に、1m×1mの区画を10カ所つくりました。ほぼ一直線に並んでいます（下図参照）。
- ・調査区は、テントに近い方から①、②、…、⑩としました。調査区①～⑥（以下「調査区A」）は「平坦～やや凹地形」、⑦～⑩（以下調査区B）は「平坦～凸地形」となっています。

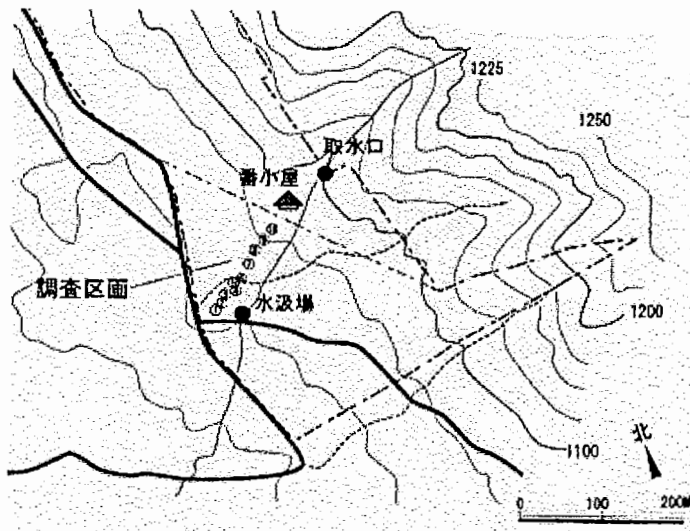
●調査の内容

- ・各区画について、(1) ススキの被度（どれくらいの面積を占めているか）、(2) ススキの高さ（その区画で一番高いもの）、(3) その他どんな植物がどれくらい生えているか（植物の種類・被度・本数など）を調べました。
- ・各区画の植物を根際から刈り取って(4) ススキの根元直径（10本のサンプル調査）を測り、完全に乾燥（熱風乾燥）した後、(5) ススキとその他の植物に分けてそれぞれの重さ（乾重量）を量りました。

●調査の結果（表とグラフを参照してください）

<植物の種類について>

- ・【表1】10㎡の調査区全体で、36種類の植物が見られました。調査時期が異なれば種類はもっと増えると思いますが、いずれにしても野焼きをしたらどうなるか。植物数は増えるのか減るのか、植物の種類はどう変わるのかなどが注目点です。
- ・【表1】共通して見られる植物は、ススキ、ヤマハギ、ワラビ、ヨモギ、スミレ類、ヤブマメ、ヘビイチゴなどです。
- ・【表1】調査区Aと調査区Bでは見られる植物が異なります。調査区Aのみに出てきたのは、トリアシショウマ、オカトラノオ、ナワシロイチゴ、シシウド、ゲンノショウコ、フタリシズカ、ヒキオコシ、ツリフネソウなど、やや湿性の植物が多いようです。調査区Bのみに見られるのは、オミナエシ、ノコンギク、ミツバツチグリ、ニガナ、オトコヨモギなどで、やや乾性の植物となっています。
- ・【グラフ1】10の調査区のうち、2カ所以上で見られた植物は19種類でした。かつて「入り会い」がおこなわれていた頃の有用資源だったススキ、ヤマハギ、ワラビも含まれていますが、ワラビがやや下位ランクでした。秋の七草のオミナエシが3カ所で見られたのも、私たちにとっては「希望」です。木本植物のコマユミが2カ所に出現しています。遷移が進みつつあるシグナルかもしれません。



<バイオマス量について>

- ・【表2】調査区Aの方が調査区Bに比べ、「ススキは背が高く太く、たくさん生えている（被度と乾重量が大きい）」、「見られる植物の数が多い」という傾向がありました。具体的には、ススキの1㎡当たりの乾重量は、調査区Aは調査区Bの約2倍、太さも約1.6倍ありました。ススキ以外の植物についても、1㎡当たりの乾重量は、調査区Aは調査区Bの約1.3倍ありました。
- ・【表2】ススキの量が最も多かったのは調査区⑦。高さも一番で、太さもそこそこあります。長く、しっかりしたススキが生えているということでしょう。刈り取りや野焼きなどの管理をすることによって、ススキの割合が増えれば理想的な区画と言えるかもしれません。なお、ススキの乾重量は調査区全部の平均で740g/㎡。上の原10haのカヤ原に換算すると、74tのススキ量になります。2tトラック37台分ですが、さてこれはどんな量なのか…。
- ・【グラフ2】表2の乾重量と根元直径をグラフにしたものです。太いススキが生えているところはススキの量（乾重量）も大きい、という傾向があります（当たり前？）。調査区⑦でススキ以外の植物の量が大きいのは、ヤマハギがたくさん混じっていたからのようです。

●ススキが比較的多い場所で見られた植物一覧(10月19日調査)

【表1】

植物名	(A)調査区①～⑥/下部				(B)調査区⑦～⑩/上部			
	高さ	被度	本数/㎡	出現調査区数	高さ	被度	本数/㎡	出現調査区数
ススキ	242 cm	67%	・	6	214 cm	55%	・	4
ヤマハギ			3.3	3			5.3	3
ヨモギ			3.3	4			5.0	3
ワラビ			2.0	1			1.7	3
トリアシショウマ			4.2	5			・	・
オカトラノオ			4.2	5			・	・
スマレ類(2種)			3.8	4			1.0	1
ナワシロイチゴ			2.5	2			・	・
ヤブマメ			1.5	2			2.0	1
コマユミ			1.0	2			・	・
シシウド			1.0	2			・	・
アカソ			8.0	1			・	・
ゲンノショウコ			8.0	1			・	・
フキ			4.0	1			・	・
ヘビイチゴ			3.0	1			1.0	1
フタリシズカ			3.0	1			・	・
ヒキオコシ			2.0	1			・	・
ツリフネソウ			2.0	1			・	・
キンポウゲ科の1種			2.0	1			・	・
オオヤマフスマ?			1.0	1			・	・
カラマツソウ			1.0	1			・	・
カセンソウ			1.0	1			2.3	3
クマイチゴ			1.0	1			・	・
コウゾリナ			1.0	1			・	・
トネアザミ			1.0	1			・	・
ミツバツチグリ			1.0	1			・	・
フユノハナワラビ			1.0	1			・	・
ノコンギク			・	・			4.7	3
オミナエシ			・	・			2.3	3
ミツバツチグリ			・	・			1.7	3
ニガナ			・	・			1.3	3
オトコヨモギ			・	・			3.5	2
ヨツバヒヨドリ			・	・			1.0	2
ノハラアザミ			・	・			1.0	1
ナツウダイ			・	・			1.0	1

●各調査区のまとめ

【表2】

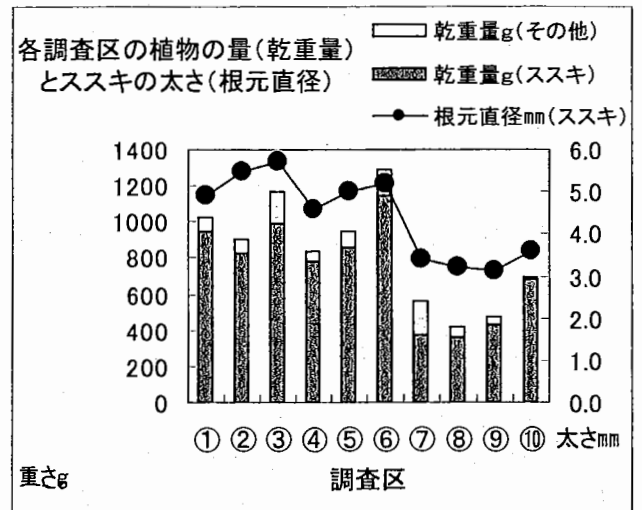
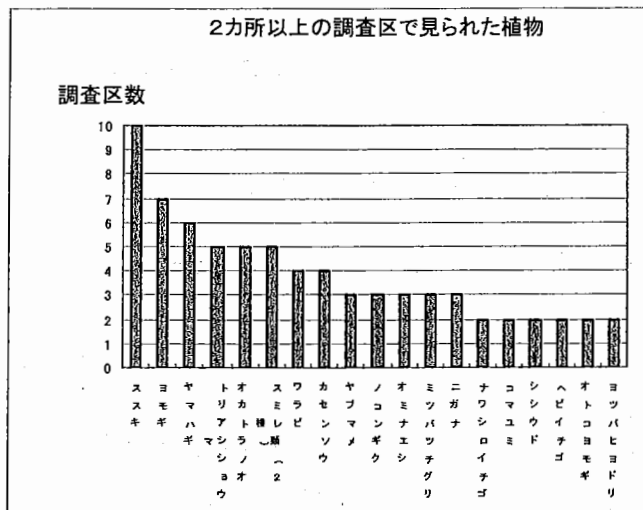
調査区	ススキ				その他	出現植物数
	被度%	高さcm	根元直径mm	乾重量g	乾重量g	
①	80	225	4.9	944	83	8
②	60	230	5.5	826	73	10
③	70	230	5.7	991	183	8
④	60	240	4.6	783	57	7
⑤	70	260	5.0	864	82	10
⑥	70	265	5.2	1,150	143	9
①～⑥	68	242	5.2	926	104	28(4.7/m ²)
⑦	40	245	3.4	373	194	11
⑧	40	213	3.2	359	58	9
⑨	60	197	3.1	431	41	9
⑩	70	202	3.6	678	17	8
⑦～⑩	53	214	3.3	460	78	15(3.8/m ²)
調査区全体	62	231	4.4	740	93	36(3.6/m ²)

※ ススキの「高さ」は、その調査区でもっとも背の高いもの

※ ススキの「根元直径」は、各調査区10本の平均値

【グラフ1】

【グラフ2】



■カヤ原の追跡調査を考えています (中島武)

紅葉と青空、そんな素晴らしいロケーションの中で10月18、19日の両日、青水の森の茅原で茅刈りと仮小屋の屋根葺きを中心としたフィールドスタディに参加させて頂きました。

地元といえどもどちらの作業も経験したことのない私にとって、林包芳さんの手際の良さ、阿部惣一郎さんの魔法の指先を見て、“POWER”よりも技術が優るということを身をもって体験しました。素晴らしい伝統の技術です。青水の宝物として後生に伝えていこうではありませんか。

午後のプログラムで屋根葺きのグループから離れて植生調査を開始した私たちですが、葉が落ち枯れた茎ばかりが残る植物の同定作業は容易ではありませんでした。キク科植物のカセンソウの名前が出てこずに最後まで??? 多年草のオトコヨモギは本年生の葉の形があまりに違っていて??? ふだんは花がある緑色の植物ばかり見ているので観察力が衰えてしまったのでしょうか、初心に戻るちょうど良い機会だったようです。

その後バイオマス測定のための刈り取りを行ったのですが、思うように作業がはかどらずあせりばかりが先立ち、そうこうしているうちに上の方から大きな歓声が聞こえてくるではありませんか。茅葺きが終わったようです・・・時計を見るともう3時、みなさんお疲れ様でした、では私達も・・・とはいわず、若干の刈り取りと袋詰めが無事終了。

なにはともあれ私なりに今後の追跡調査の課題を見つけて、その内容についてあれこれ構想を考えることの喜びが感じられた、とても充実した一日でした。

2. 古老ヒアリングの結果について (海老沢秀夫)

2003年10月17日(金)の20時から、民宿「山椒」でヒアリングをしました。地元から、林包芳さん、阿部惣一郎さん、林親男さん、中島武さん、高田保さんらが同席、雑談ふうに話をお聞きました。まとまりがありませんが、メモできた範囲で以下報告します。

- ・ ハギは野焼きをしても絶えてしまうことはない。
- ・ 茅場にかつて、コマユミやハナヒリノキなどの低木は生えていなかった。
- ・ 学校に通っていたころ、学校の掃除に使うために箒を作って持っていった。コマユミ(ホウキの木)、ハギ、ドウダンツツジなどで箒を作った。
- ・ 「草箒(くさぼうき)」といって、ホウキグサで作る箒があった。これは上等で土間用だった。
- ・ カンジキはジシャの木(アブラチャン)で作った。木は温泉の湯に浸して曲げた。
- ・ 湯ノ小屋の温泉は、麻の皮を剥くためにも使った。刈り取った麻を長いまま持って行って、国有林(営林署)のトロッコで運んだ。昭和20年代後半~30年代初めごろの話だ。
- ・ 木材の相場がよくて営林署の景気がいいときは、それはにぎやかだった。戦後はじめてトラックを導入したのも営林署だった。
- ・ 林親男さんがトラックを買ったのは昭和30年。トヨタの1トン車。藤原で4台目の自動車だった。薪、炭、木材など何でも運んだ。人も運んだ。善光寺参りに行く人を運んだし、新潟へも頼まれて人を荷台に乗せていった。
- ・ ブナ林は標高650メートルくらいから出てくる。「ハマセン」のベニヤ工場があって、そこへ切り出したブナを運んだ。その後ブナをチップにするようになったが、その時はもう営林署が落ち目になってきた頃だ。
- ・ 藤原では焼き畑のことを「カンノ」といった。
- ・ 干し草のことを「カッポシ」という。肥草(ひくさ)にするカッポシは夏、梅雨が明けるまでに刈った。
- ・ 茅葺き用の茅刈りは、まず地区全部で刈った。それぞれの家の人が「何把」刈ったかを報告させ、合計を出して、それで屋根葺きに足らなければ、茅を必要とする家の親戚が後で刈った。
- ・ クルミはボタ(ゴヘイ餅のたれ)を作るときに使った。

3. 茅刈りと茅の輪、番小屋づくり

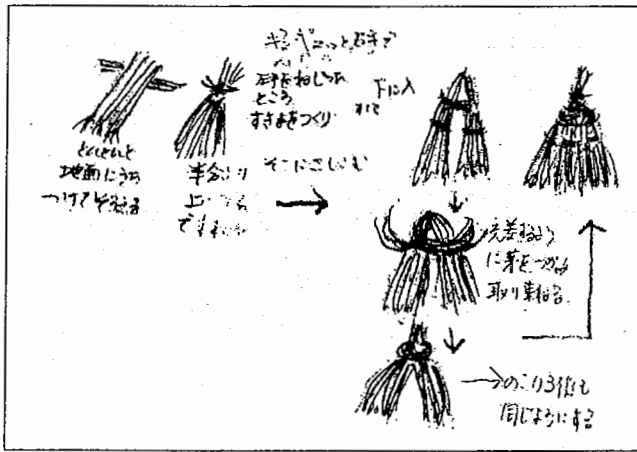
■茅刈り名人(中川茂子)

透明感のました空、お化粧した山、ススキを通る風、草木の臭い、みんな秋のまっさかり。今日は茅刈りの日。本日の師匠は地元の林包芳氏。まず師匠に茅の刈り方の実演をしてもらい挑戦してみました。教わった通りヨモギやワラビや雑草を刈り取って捨て、左手を時計と反対回りに大きく回して左脇に茅を抱え、左足の方から茅の根本にカマを入れて刈ってゆき、同時に右足を後ろにずらしていくと楽に刈れました。実は午前中、自己流で刈っていたのですが、おろしたばかりのカマは、ぞくぞくするほどよく切れて、思わず両足首まで切ってしまうそうになり、ドキットすることが時々ありました。足首のあるうちに教わって本当に良かったです。

刈り取った茅をトントンと地面に打ちつけて根本をそろえて、やわらかそうな茅5~6本を帯にしてギュギュとねじり、左手をその下に入れてすきまを作り、ねじったこぶを押し込むと1束の出来上がり、これを5コ作って立てたものが、1ポッチとなるそうです。茅の単位はポッチと呼ぶそうです。ポッチの並ぶ風景はゆったりとしていいな—と思いました。



カヤ刈りの 手休めれば
夕映えの 谷川岳の 山頂の見ゆ (伊佐子)



今回は時間がないので乾燥させないまま葺き方をやりました。ポッチの先を肩にかけて引きずっていくのが、正式な運び方と言われましたが、先人達の考案した知恵はさすがでした。5コの束はまず2束を立て、茅をたすきに取り出してギュギュとねじり、先ほどのように押しこみ、残り3束をバランス良く配置して同じようにいわき、最後に穂先までくくりあわせませす。その時スキの種がパラパラと顔に飛んで来ます。ひもも縄も1本も使いません。山の上まで細い道を運んでも、ゆるんだりほどけたりしません。すごいと思います。1ポッチはとても重

く男性群もヘトヘトです。ものすごい重労働ですが、足元は、カンタンが鳴いておりました。簡単と言ったかどうかわかりませんが・・・。

■「惣一郎小屋」完成！（湯本信康）

10月19日、抜けるような晴天のもと、仮小屋の屋根葺きが、地元の茅葺き名人・阿部惣一郎さんの指揮で、仮小屋建設班の手で始められました。前回9月15日に途中まで葺かれたあとをうけて、今日中に完成させる予定です。前日、林包芳さんの指導のもと、全員で刈り取った茅が小屋の周りに積まれており、一人ひとりが両手で一抱えほどをより分け、根元を揃えて、穂先を上に向けて、骨組みの上に並べて葺いていきます。

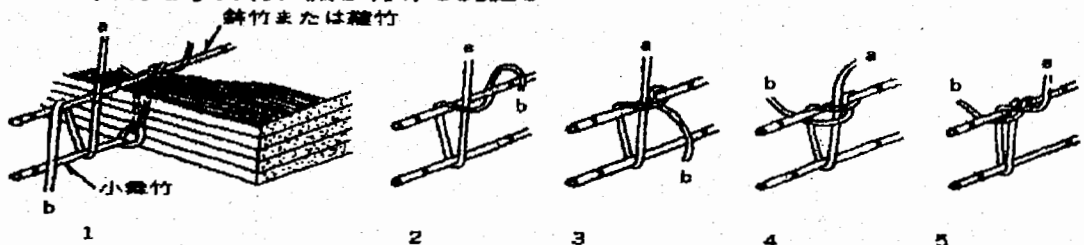
二段葺くと一区切りとし、茅の根元をコテで叩きながら揃え、その上に鉾竹を置き、屋根裏の小舞竹に結び付けていきます。縄や針金を竹針の穴に通し、一人は屋根の上に、一人は屋根裏にいて、互いに針をやりとりして縫い付けるという、二人の掛け合いの仕事です。その縄結びの方法が伝統技術ともいえるべきもので、鉾竹を足で踏み押さえ、縄を引っ張ればいくらかでも締まり、手を放してもゆるまないという特徴があります。また、名人が刃物を使わないで縄や針金を切断する技も見事で、皆で挑戦してみたが誰も出来ませんでした。伝統技術とは、経験と知恵の集積によって生み出された方法だといわれますが、正にその通りだと思いました。

半分ほど葺いたところで、名人は葺き方を変えました。先ほどまでは、根元を下にして穂先が隠れるように葺いてきましたが、今度は、根元を上向きにして穂先が外に出るように「逆さ葺き」にしました。この方法だと茅の使用量が少なくて済み、作業時間も短縮できるので、山小屋での葺き方だそうです。用意した茅の量が不足気味であり、しかも今日中に葺き上げなければならないという事情でしたので、名人のとられた配慮には頭が下がります。後半のほとんどが名人ひとりで葺き上げられ、仕上げは軒先の茅の根元をハサミで刈り込んで揃え、屋根葺きが終わりました。

澄みきった青空を背に、いま完成した屋根の上に立った阿部さんは、茅葺職人としての誇りに満ちた姿に映りました。「この小屋はほとんど阿部さんの手で作られたようなものだ。これで名前は決まりだ。」と塾長の声。2003年10月19日午後3時、『惣一郎小屋』がついに誕生しました。



＜参考＞ 鉾竹を小舞竹に結び付ける縄結び





■茅の輪作りてん末記（川端英雄）

茅の輪。あまり耳慣れない言葉。「六月祓え(ミツツキハラエ)に用いる具。これをくぐれば疫気を祓うという。すがぬき。」と、広辞苑にあり。清水塾長から頂戴した‘茅の輪’関連資料には、もっと、本質的なことが書かれていたけれど、しよせん「今はどちらかという、災難よけの思いしかないみたい。」とあるのが、私なんぞのレベルである。

9月14日~15日 快晴 空は青いが、まだ、紅葉には早い。山の稜線がやわらかい。

まずは、小屋や茅の輪作りの基材となる丸太ん棒を、ベースキャンプから作成予定地まで担ぎ上げる。皺腹抱えたわが身を引き上げるだに苦しい急坂を、二人がかりとはいえ水分たっぷりの丸太かつぎは、想像以上にきつい。ついで、作成予定地で茅を刈り、刈った茅を紐でくくって小屋付近まで運ぶ。その一部は、茅の輪にまわるはず。

‘国産木材で100年住宅造り’に実績あるたのもしい限りの池田さんが、ご自身で作成された絵図を参考に浅川・海老沢・川端の3人に、その形と製作手順を示される。いつも感心していることだけれど、青水会員はその多忙にかかわらず手早く、そつがない。きょうもプリントされた‘茅の輪作り 手順’書が出来上がっている。どうも自分には、猿にもできる反省が不足している……池田さんの柔和な顔つきを見ながら考える。

池田さんから「あと10歳若かったら、俺の弟子に…」と折り紙をつけられた浅川さん。誰の眼にもおなじなのか、小屋の屋根下地造りに声がかかり、茅の輪の戦列をはなれる。海老さまも、歌舞伎の中年女性ファンからではなく、己のやむに止まれぬ大和魂、否、植物たちの声なきこえに誘われて、植生調査に行ってしまう。黙々と木組みを続ける池田さんのまわりを、不甲斐なきをのりながら自分はウロウロする。

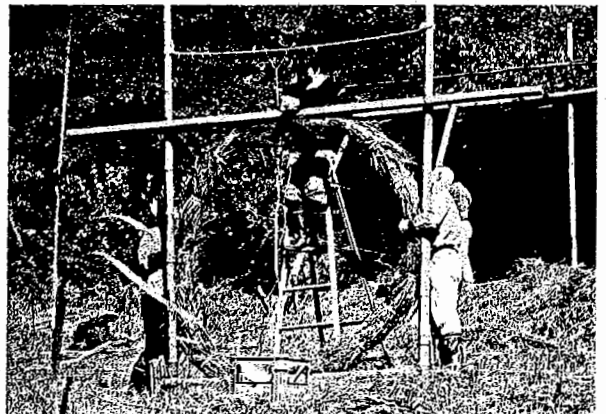
タテ・タテ・ヨコ・ヨコと、丸太を井桁に組み上げる。タテ・タテは地中深く、1疋以上埋め込む。青空をキャンパスに、脚立にまたがった池田さんが、口元も硬くタテとヨコを荒縄でしめている。まるで、かやぶき(歌舞伎)役者みたい。やがて、池田さんも棟梁として茅葺き小屋軍に参陣。一人ぼっちの新兵さんは、縦割りにしてもらった竹をつなぎながら、直径2疋くらいのサークルに仕立てようと思う。が、ままならず、結局、とにかく忙しい池田さんが仕上げる。

とかくしているうちに、2日目の陽もはや中天をすべり落ちて、風が肌寒い。茅の輪の骨格は出来上がったが……さあ、あとはこの次だ！

10月18~19日 快晴 山は錦秋織りなし、空は抜けんばかりの蒼さ。水上町藤原郷では空と山が秋の大合奏。茅も前月より丈が伸びたようだ。

阿部師匠。こんなんじゃ、とても茅葺きには足んねえだよ。茅の刈り方、結わえ方、束ね方を、あらためて古老から教わる。見るとやるとでは大違いながら、それでも上手にできる人もいるもんだ。不甲斐ない自分を嘆く。そして始まる死の行進。茅がこんなにおもいものとは、おもいもよらなかった。あえぐ。喘ぐ。

ほっと、一息もいれずに茅の輪に取り組む。きょうはサークル状に仕上げた茅の輪を、鳥居の形をした木組みに取り付け、うえの方のヨコにさがり(御幣)をぶら下げて完成だ。



急ピッチで進む小屋造りのあおりで、きょうも両方かけもちの池田さんが忙しい。しかし、海老さまも人手不足のはずの植生調査の手を休めて、茅の輪に駆けつける。自分の役割をきちんと果たしながら、大事のところではすかさず手を差し伸べてくれる海老さま。猿之助みたいに格好いい。浅川さんも、これまた屋根の上から池田さんの苦労のさまを見かねたか、竹の輪に茅をしっかりと巻きつけるところで、馳せ参じてくれる。海老さま、浅川さん、景色だけでなくいい眺めを見せてくれる。

バンザイ 完成だ。茅の輪をとおして谷川岳が見える。右肩がグッと落ち込んでいる様子が、青い空にくっきりと映っている。「ほら、谷川岳の左を見てごらん。崖が見えるところが、一の倉沢だよ」完成した茅葺き小屋と茅の輪のあるところからみる眺めは、五右衛門も絶句かな？小屋の後ろにある林の中には磐座（イクラ…神の御座とされる岩石）もあるし、小屋をもうすこし整備したいし、この茅場に愛称もつけたいし、ああ・・・来年が待ち遠しいな！

神代より かくやあるかや かやの原 <冗句>

■一皆で感動をありがとうー（池田登）

今年最後と思われる森林塾会員による水上上の原でのフィールドスタディ、番小屋、茅の輪作り、感動の数日間でした。多くの協力者、地元の指導者に恵まれた茅場の整備の第一歩。森林塾「現代版入会慣行」をめざし、実質的初年度のフィールドスタディも、よくばりすぎた感もあったが、すばらしい成果を見たと考えております。

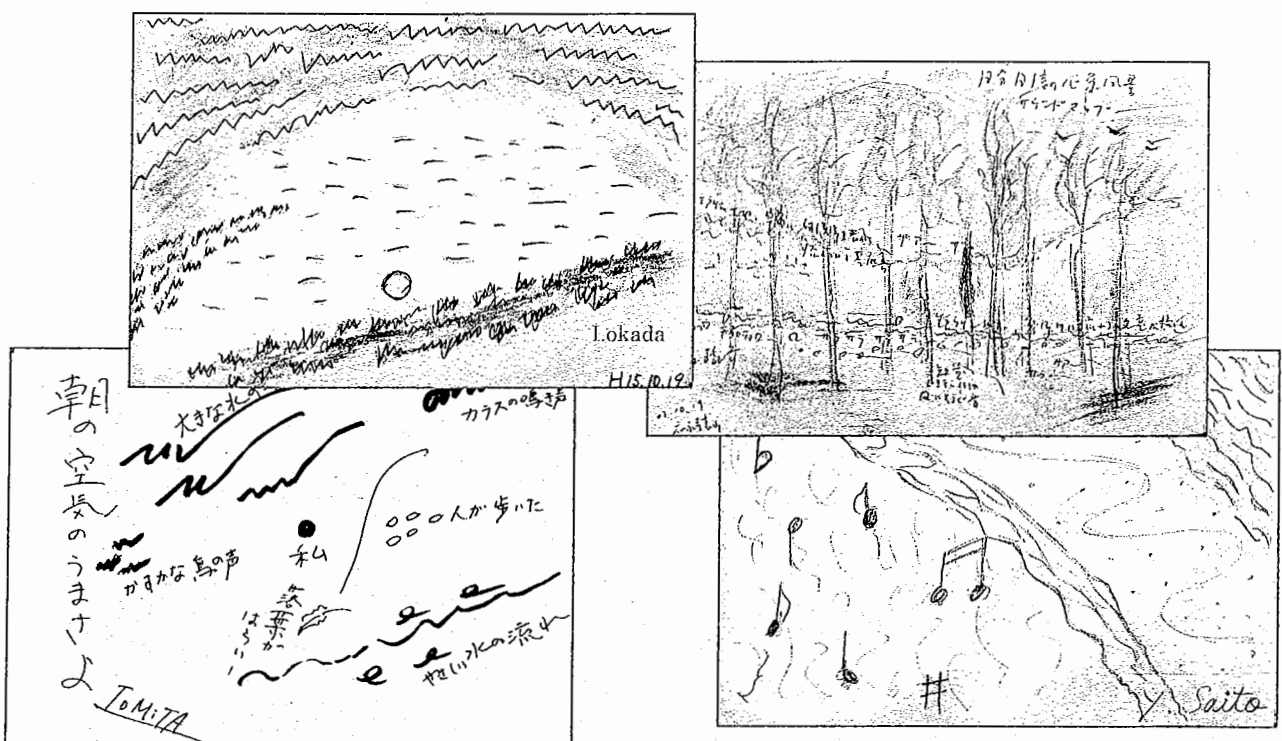
地元の方々との結びつきの中、協力しあう心の形も出来つつあり、晴天の茅原にすがすがしい風を感じた想いです。林包芳さん、阿部惣一郎さん、茅原でのご指導本当にありがとうございました。

今後も上の原のフィールドで新しい試み을続けてゆく。そんな森林塾の方向性を見いだした今回の番小屋、茅の輪作りの体験でした。

4. 朝の散策ー美しき音との出会いー（富田良子）

10月19日（日）の朝、早起きして宿の隣りにある應永寺の裏山を散策しました。岡田（伊佐子）、斉藤、富田、三好、川端、清水、湯本の善男善女（？）7人が参加、音のいろいろを地図にしてみました。流れる水にも色あり、リズムあり。粧いはじめた木々たちとの語らい。思索し、笑い、詩人になった朝のひとつ。楽しさいっぱい！！里の音。

●裏山の水音に耳傾けて作ったサウンドマップです



●気分がよくなって俳句（冗句？）や短歌も出来ました！！

鶏鳴に 目覚めていたり 今朝の秋	青水
木々々々々 気につつまれて 落ち葉ふむ	英雄
古寺の 裏山の道 森閑と 小川の水の 音のみ聞こゆ	伊佐子
邯鄲の ほうほろ啼くや 薄原 この日限りと しばし佇む	青水

5. 原 剛さんからのメッセージ (清水英毅)

— あなたは、あなた自身の風景をもっていますか —

18日（土）の昼下がり。『雨過天青雲破処』。後周・世宗帝期待の青磁の色かくもあらん、と思えるほど美しい晴天のもと、初めてご参加いただいた原先生をススキ草原からミズナラ自然林へのご案内した。

道々、景観と風景と風土の違い、関係等について言及され、早稲田の教え子諸兄に、「君たち自身の風景もってますか」と問いかけてみたい、との由。そして散策のあと、「清水さん、ここには既に、皆さん方にとっての素晴らしい風景がありますね」とのご感想。——とても、とても嬉しいお言葉でした。

以下は、東京にお帰りになった原さんから小生宛の私信。当塾々生あてのメッセージとして公開することをお許しいただき、上記のお言葉に併せ、全員で共有したく紙上ご報告する次第です。

<p>冠省</p> <p>十八日はまことに楽しい発見の多い、秋の玉露の如き一日でした。</p> <p>青水同人たちの刈る姿、村人との交わりの光景に多く感ずるところあり、いろいろな思念が錯綜するのを覚えしました。</p> <p>楽しい語らいの夕べに皆さま方の心の通い合いを感じ、こちらは初参加ながらボルテージが上がりっ放しでした。</p> <p>(中略)</p> <p>入会慣行に現代の光をあて、都市が相棒となってこれを復活、創造する試みは、二一世紀にむけ、実に意義深いパラダイムシフトであると思います。</p> <p>(中略)</p> <p>青水の大河の奔流とならんことを祈念しています。</p> <p>平成十五年十月二十日</p> <p>草々</p>
--



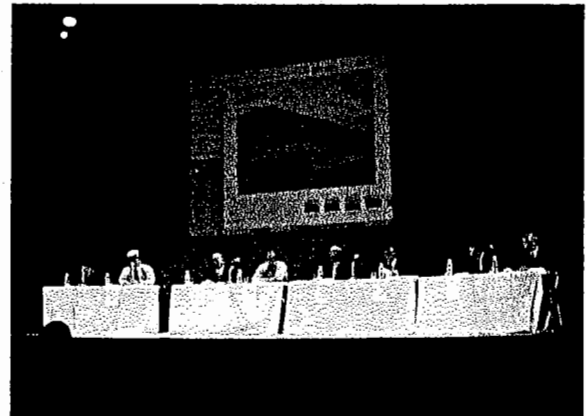
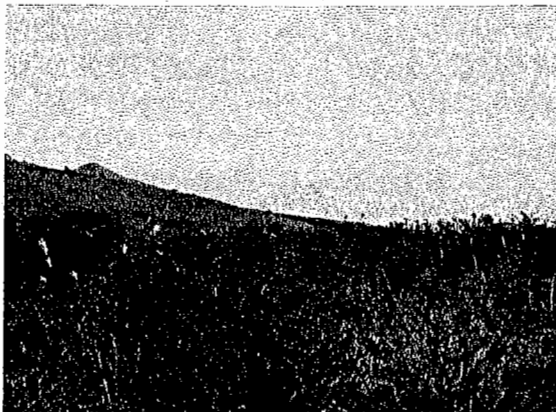
6. 事務局からの報告とお願い

■ 霧ヶ峰草原サミット・シンポジウム参加報告（海老沢秀夫・浅川潔）

10月11日(土)と12日(日)の2日間、長野県の上諏訪・霧ヶ峰高原でおこなわれた「第6回全国草原シンポジウム・サミット in 霧ヶ峰」に海老沢・浅川の2名が森林塾を代表して参加しました。

草原シンポジウムは、草原は火入れ、放牧、採草など農畜産の営みによって、入会地として利用、管理されてきましたが、現在は農畜産の減少により衰退しています。このような状況の中、草原に対する人々の関心を高めると共に、草原の保全と活用について、行政、地元、畜産業者、観光業者、都市住民などが議論を行う場として、大分県久住高原で始まり三瓶山、秋吉台、阿蘇などで行われてきました。

- 1日目は、プレイベントとして「霧ヶ峰の草原を体感する」と題した草原ウォークが参加人数20名ぐらいで午後からありました。曇りがちな天気でしたが、視界は広がり八ヶ岳・富士山から南アルプス、木曾御嶽山、北アルプス、白馬山麓まで見渡せました。霧ヶ峰車山肩～ゴマ石山～園地まで2時間ゆっくりと、霧ヶ峰ガイド組合員に案内してもらえました。霧ヶ峰の抱える課題は、①ビーナスライン(観光道路)が02年に無料になり、マイカーが3倍に増え年間354万人訪問し大渋滞。②観光客が増えて、草原への踏み込み、植物の盗掘、ゴミの散乱が増えている。③レンゲツツジは現在一番の観光資源だが、草原の「森林化」として問題。その後、スライドを使って「霧ヶ峰・自然とその歴史」についての説明と、地元牧野組合長から草原の歴史と現在の状況についてお話がありました。



- 2日目は、諏訪市文化センターに90名程度集まり、午前中がサミット、午後はシンポジウム分科会が開かれました。地元の「八剣太鼓」の演奏で始まり、諏訪市教育委員会の鮎沢氏による基調講演「霧ヶ峰の今・昔」と諏訪大社との関係から始まる霧ヶ峰の歴史について、牧野組合の体験を交えてお話しいただきました。次に実行委員会から「心に残る草原を将来へ」と趣旨説明があり、その後、各草原から現状と保全と活用について報告がありました。

阿蘇	阿蘇山に広がる放牧地標高400m～1,160m、22,955ha(防火帯だけで600km)野焼きボランティアを育成して野焼き実施
久住高原	大分県久住町約4,000ha、標高900m、野焼きボランティア
秋吉台	山口県秋吉町・美東町1,500ha、標高200m～430m 2町共催により自治会・消防団協力で半日かけて山焼き実施
三瓶山	島根県太田市三瓶高原200ha 標高450m～900m 放牧地 草原内イバラ刈り、防火帯(移動電気柵で牛が食べてつくる)野焼き
蒜山	岡山県蒜山高原2,000ha、標高500m～1000m 農地、樹林地、別荘地、採草放牧地、スキー場など多様な土地利用 権利を主張のために野焼き実施、茅の屋根材利用
霧ヶ峰	長野県諏訪市2,300ha、標高1500m～1925m 草原内の雑木処理、外来植物除去、山火事防止のため一部野焼き実施

午後から第一分科会「野火と草原の多面的な価値」、第二分科会「住民の暮らし・産業と草原」第三分科会「来訪者と草原」に分かれて、シンポジウムが行われました。海老沢が第一、浅川が第三に分かれて話を聞いてきました。少ない人数でしたが参加者の意見も多く、規模は違っても

どこでも同じような悩み、人の育成とお金の確保の課題をかかえています。詳しくは次回勉強会でご報告します。

サミット終了後、交流会にも参加し、最終電車までの時間内で各地の方々と意見交換、森林塾青水のパンフレットを配布しPRしてきました。

●霧ヶ峰高原について

霧ヶ峰が抱えている課題は、「ピーナスラインという観光道路が02年に無料になってからというものの、マイカーでの入山が3倍に増え、入山者の数は現在、年間354万人になっている。特にニッコウキスゲやレンゲツツジなどの花のシーズンには、頂上付近まで通じている道路に車が数珠つなぎになってしまう」そうです。「草原への踏み込み、植物の盗掘、ゴミの散乱も多くなってしまいました」観光草原としての霧ヶ峰の悩みです。

しかし霧ヶ峰の、草原としての本質的な問題は別のところにありました。「レンゲツツジは現在のところ観光資源なのですが、実はこれが問題なんですよ」ガイドの方が言っているのは、草原の「森林化」問題なのです。湿潤な日本では、草原もほうっておけば木が生え森林になっていく。霧ヶ峰でもそれが徐々に進んでいて、中でも顕著なのがレンゲツツジの急増なのだそうです。場所によってはミズナラ林になってしまったところもあります。霧ヶ峰の草原は、もとは農耕用の牛の飼料にするための草刈り場でした。「平安時代から草原だった」という話もありますが、盛んに利用されるようになったのは江戸時代です。複数の村が入って使う、いわゆる「入会(いりあい)地」でした。草を刈り、山焼きをしてきたのです。そのために森林化がさまたげられ、草原が維持されてきたわけです。戦後、農地改革を機に「入会」は「牧野(ぼくや)組合」や「財産区」に衣替えしました。しかし「役牛のエサにするための草刈り場」という意味は変わりませんでした。その意味が薄れていくのは昭和20年代後半、牛の代わりに耕耘機が普及し始めてからでした。霧ヶ峰の草原は徐々に、草刈りも山焼きもされなくなっていくのです。ただ、一区画だけ山焼きが続けられてきた場所があります。約42ヘクタール。目的は「草」ではなく「類焼防止」でした。周辺に増えてきた造林地や観光施設を「野火」から守るために、枯れ草をわざと焼いたのです。ここは現在でも山焼きがおこなわれていて、「他の場所とはちがう草原になっている」そうです。

「最後の草刈りは昭和36年。中村さんという人が最後だった」それから40年、霧ヶ峰は草の利用がされることなく放置されました。それにしても意外に「草原らしさ」は残っています。しかしレンゲツツジに象徴されるように、「森林化」は徐々に、速やかに進行しています。「子どものころ、霧ヶ峰に木は1本もなかった」地元60代の方の発言です。霧ヶ峰の草原は2300ヘクタールとされています。日本有数の草原とっていいでしょう。亜高山にある草原という意味でも貴重とされています。生態資源としても観光資源としても重要です。「霧ヶ峰は森林ではなく草原として保全していく」それには、「団体間のパートナーシップ、コラボレーション」が必要です。今回の草原シンポジウム・サミットに参加していた阿蘇(熊本)、久住(大分)、三瓶山(島根)などではそれが実現しています。霧ヶ峰でもおそらく、今回のシンポジウムがきっかけになって、貴重な草原生態系・景観を保全する「パートナーシップ」が生まれるに違いありません。

阿蘇、久住、三瓶山の草原は放牧地です。「畜産」との関係が強い草原です。ところが霧ヶ峰は畜産との関連はありません。産業としては「観光」とのつながりです。先例に学びつつも、独自に解決し、草原を保全する仕組みを新しく発明していかなければならないようです。霧ヶ峰の今後注目したいと思います。

ところで信州生まれの俳人に小林一茶がいます。故郷を詠んだ句もたくさんあって私は大好きです。

「大雪を杓子でとかす子ども哉」「雪とけて村いっばいの子ども哉」こうして春が来ると、一茶の村周辺では「山焼き」があちこちで盛んに行われていたようです。



「又一つ山をやく也おぼろ也」「野火つけてはらばうて見る男哉」などと、一茶は「山焼き」「野焼き」「野火」の句を実にたくさん作っています。一茶が「野火つけて...」と詠んでいたころ、霧ヶ峰でも山が焼かれていたに違いありません。

■森林塾青水会員アンケート実施について（浅川）

今年、塾の体制づくり、水上町とフィールドの借用契約、麗澤中学の自然学習プログラムの受入、フィールドスタディ、茅刈り、仮小屋づくり、「茅風」通信発行など、短期間に様々なことを行ってきました。そして、水上町役場と藤原地区及び地元の方々との繋がりも強くなり、今後は益々地元・地域社会との連携活動も増えてくると思われます。今年のフィールドでの活動も前回で終了いたしました。そこで、あまりフィールドに行けなかった方もこの一年をふり返って、反省すること、楽しかったこと、来年以降行いたいこと、塾の今後の方向などについて、皆様のご意見・ご感想を聞かせてください。アンケートをもとに今月末幹事会で検討を行い、来年以降の活動計画（案）を作成していきます。

次頁アンケート用紙に記入の上、ファックス又はメールで事務局宛に必ずご返送ください。

FAX : 03-3345-7471

Mail : sinrinjyuku@fiberbit.net

返送締め切り日 11月14日（金曜日）

■今後の予定について（浅川）

10月の第4回フィールドスタディをもって現地での活動を終え、11月から3月までは、東京でこれまでの成果をまとめ、共有する学習会・交流会を行います。また、1月には新年会・総会を予定しています。日程は別途お知らせいたしますので、よろしくお願いたします。

7. 編集後記にかえて —フィールドスタディの反省—

今年4回目のフィールドスタディが終った。1回平均25名、計100名が参加。普通1泊2日だから、延べ200名がフィールドで汗を流し、地元の民宿でお世話になった計算。

最終回だから今年の総括と言いたいところを、とりあえず今回の反省を以下に箇条書き。塾生各自、上記アンケートに備える意味でも、1年間の振り返りと来年の夢を描いてみて下さい。

○収穫～よかった事、継続・定着・実現させたい事など

- 1.原さん、三好さん（湯本さんのお仲間）、佐々木さんと小池さん（共に朝日新聞社、海老沢さんのご案内）と初参加者が4人もおられたこと。そして、皆さんの感想やお言葉により、我々のフィールドの素晴らしさを地元の皆さんと共々、再認識できたこと。
- 2.カヤ原の植生調査が初めてできた。しかも、36種類もの植物を確認。
- 3.惣一郎さんの指導で、茅葺きの番小屋、さらに茅の輪も完成。包芳さんの指導で「藤原流」カヤ刈りをマスター。また、これら一連の作業を地元の皆さんを含む共働・参画型で行い、一体感が醸成されてきた。
- 4.（有）町田工業（日本伝統建築技術保存会々員）との折衝により、永きにわたり放置され無用の長物であったカヤ（原）に日が当たり、地元の皆さんの手でカヤを刈り取ってもらい、それが市場性を持つ（つまり有償で買い取ってもらう）可能性が出てきたこと。将来的には、集落内の諏訪神社や雲越家住宅の屋根も、昔の「結（え）いっこ」方式で葺き替えることも夢でなくなってきた！
- 5.その他、初のサウンドマップ作成や冗句会（？）の試み、などなど。

●反省材料～要改善、検討課題など

- 1.作業班分け失敗。植生調査チーム、少なくなってしまった。海老沢さん、ゴメン！
- 2.作業終了後、鎌研ぎができなかった。時間の関係もあったけど、次回からは必ずやりたい。
- 3.これも時間のせいにしたくないけど、今回もゴミ拾いができなかった。最後ではなく最初に全員一斉方式がよいのか？
- 4.お昼のキノコ鍋、最高にうまかったけど、あのスチレンカップ皆使い捨て！次からはマイカップ、マイ箸必携に。カヤ箸、ハギ箸も作ってもらったことだし。
- 5.その他、地元会員諸氏の参加が少なく、ちょっぴり寂しかった。仕事抱えて大変だと思うけど……、などなど。

以上、お世話係のつぶやきでした。いづれにしても、ご多用^(の中)レポートお寄せいただいた中島武さん、中川さん、富田さん、岡田（伊佐子）さん、斉藤さん、川端さん、湯本さん、池田さん、浅川さん、海老沢さん、ありがとうございました。 (青)

森林塾青水アンケート	お名前
<p>1. 今年の活動について</p> <p>①良かったこと・楽しかったこと・今後も続けていきたいこと、など</p> <p>②反省すること・改善を要すること・やり残したこと、など</p>	
<p>2. 来年以降の活動について</p> <p>①塾としてやったらいいと思われる活動・イベント、など (優先順位の高いこと、今年やり残したこと、など)</p> <p>②塾として取り組んだらいいと思われる事業 (環境学習、人材育成、茅など森林資源の活用、など)</p> <p>③ご自身が行いたいこと (ご自身の知識や特技・関心を活かして、行いたい活動や担いたい役割、など)</p>	
<p>3. 塾のNPO法人化について(行政からの事業や助成金などが受けやすくなります)</p> <p>①早くNPO法人化した方がよい どれかに○をつけてください</p> <p>②まだ早い、もう少し検討した方がよい</p> <p>③NPO法人化しない方がよい</p> <p>[理由など]</p>	
<p>4. 助成金について(事業により効果的又は受けやすい助成がありましたら教えてください)</p>	
<p>5. 会員数・会員分類について(事務局としては当面、100名程度が最大と考えているのですが現在、会員53名、会友含めて65名となっていますが会員の拡大についてご意見ください)</p>	
<p>6. 勉強会・学習会で取り上げたいテーマ・内容について</p>	
<p>7. フィールドの愛称を募集します(青水の森、茅風の森、上の原など、色々言われています)</p>	